

チュニジア・モロッコ出張報告

佐藤健太郎（日本学術振興会特別研究員）

今回のチュニジア・モロッコ訪問の目的は、中世末から近世にかけて地中海世界各地に離散していったスペイン系ムスリム（モリスコ）やスペイン系ユダヤ教徒（セファルディーム）にかかわる史資料について、マグリブ諸国における研究状況や史資料の収集に向けて予備的な調査や折衝をすることであった。

最初に訪れたのは、タミーミー研究所（Mu'assasat al-Tamīmī li-l-Baḥth al-'Ilmī wa-l-Ma'lūmāt/ Fondation Temimi pour la Recherche Scientifique et l'Information）である。この研究所が位置するザグワーンZaghwānは、チュニスの南約60キロメートルに位置する小さな町で、17世紀に最終的にスペインを追放されたモリスコたちが住み着いた町である。同研究所は、所長のアブドルジャリール・タミーミー氏が私費を投じて創設したもので、土地・建物・蔵書すべて個人所有である。立派な白亜の2階建ての建物には、研究室・図書室・会議室に加え、国際会議に開催に際して出席者が滞在できるように宿泊施設や食堂、果ては自炊用の台所まで備えてあった。図書室は、モリスコやチュニジア史を中心に豊富な蔵書を有している。研究所は、もちろんモリスコ研究の一大中心であるが、それだけではなくチュニジア史全般や異文化間の対話など、幅広く活動を展開している。現在進行中のプロジェクトは、チュニジア独立の父ブルギバ前大統領（1987年に引退を強いられた後もまだ存命）の記憶にかかわるもので、前大統領とかかわりのある人物を招いてしばしば講演会やインタビューを行っているという。

所長のタミーミー氏は、地中海周辺諸地域に離散したモリスコについての研究の第一人者である。本来はオスマン朝到来以後のチュニジア史が専門で、オスマン朝が残した膨大な文書史料を本格的にチュニジア史研究に利用した最初の研究者としても知られている。モリスコ研究に携わるきっかけも、イスタンブールやチュニジア国内の文書発掘の過程でモリスコ関連の史料に出会ったことだそうで、研究所で発行している学術誌*Al-Majalla al-Ta'rikhiya al-Maghribiya / Revue d'Histoire Maghebine*でも、新たな史料の紹介を行っている。

研究所の運営をはじめ方面で活躍されているタミーミー氏はごく多忙な方で、訪問の前日にカイロから戻られたばかり、会談中もしばしば電話の対応をされていた。会談ではひととおり我々のプロジェクトについて説明した後で、研究所やチュニジア国内にある史資料でマイクロ化・デジタル化の必要なものがないかどうか、打診してみた。残念ながら、研究所の蔵書は研究書などの刊本や学術雑誌が中心で、特にモリスコ関連の文書史料などは保有していないとのことであった。その他の国内諸機関所蔵のものについても、今すぐに我々のプロジェクトとの協力に進展ののぞめそうな状況ではなかった。しかし、チュニジア国内の研究状況をきいてみると、ザグワーンやテスツールといったモリスコが住み着いた町に残されている文書史料の発掘が個人研究者レベルで進んでいるとのこと、こうした部分で我々のプロジェクトが関与できればと感じた。もちろん、タミーミー氏が言うように、こうした史資料の収集には、史資料の所有者や現地研究者との長期にわたる信頼関係の醸成が必要であろう。

研究所ではほぼ2年に一度モリスコ関連の国際会議を催しているという。今回の訪問では史資料の収集について具体的な進展は実現できなかったが、タミーミー氏はこ

の会議に日本からも参加者を出さないかと提案してくれた。世界各国からモリスコ研究者の集まるこの会議に出席できれば、モリスコ関連史資料についての新たな情報も得られるであろう。ともあれ、今後とも同研究所との関係を維持しつつ、史資料の発掘・収集の可能性を探りたい。

次に訪れたのは、モロッコ北部の町テトワンである。ここもザグワーン同様にモリスコの町であると同時に、かつては多くのユダヤ教徒が見られた町でもある。ここでは、旧知のアブド・アルマリク・サアディー大学（テトワン大学）教授ムハンマド・ベンアブード氏にお世話になった。ベンアブード氏は、モロッコにおけるアンダルス研究の第一人者であり、東京大学イスラム学科客員教授として一年間の在日経験もある。ベンアブード氏は、最近、20世紀初頭にテトワンで発刊されていた雑誌のデジタル化作業を個人的に進められているとのことで、我々のプロジェクトにも大いに関心を抱いておられた。

ここテトワンでは、そのベンアブード氏の紹介により、ダーウッド図書館Al-Khizāna al-Dāwūdīyaを訪問する機会を得ることができたのが何よりの収穫であった。

この図書館は、20世紀のテトワンを代表する知識人ムハンマド・ダーウッド（1901～84）の旧蔵書をご息女のハスナー氏が整理して一般に公開しているもので、旧市街のムハンマド・ダーウッドの旧宅の一角に位置するこじんまりとした図書館である。ムハンマド・ダーウッドは、伝統的なイスラーム諸学を身につける一方で独立運動にもたずさわり、独立後は学術・教育関連の要職を歴任してきた人物である。晩年にはラバトの王立図書館館長にもついている。また、ライフワークとして大部な『テトワン史 *Ta'rikh Ta'tw n*』の執筆にも取り組んでおり、そのためにテトワンの旧家などから多くの手写本や文書類を収集していたという。

現在、これら多くの手写本や文書類は、このダーウッド図書館に保存されている。今回の訪問では、それら貴重な手写本や文書類のいくつかを見せていただいた。中には、14世紀のグラナダで筆写されたというコーランの手写本もあった。モリスコ関連で特に重要と思われるのは、2000点以上のアラビア語文書類である。作成年代は19～20世紀のものが中心だが、中には16世紀末とかなり古いものもある。内容は、売買契約、婚姻契約、行政文書などである。テトワンはアンダルス出身者によって建設された都市であり、これはマグリブ移住後の彼らの生活の実態を明らかにする可能性を秘めた史料群といえるだろう。また、ユダヤ教徒とムスリム間の売買文書も若干所蔵されているとのことで、こちらもいくつかを見せていただいた。中には、一点だけだがアラビア語とヘブライ語の二言語併記文書という珍しいものもあった。他の文書は全てアラビア語で表記されている。これらもテトワンのユダヤ教徒について研究する上できわめて貴重な史料であろう。さらに、モリスコ・セファルディームからは離れるが、19世紀から20世紀初頭の雑誌・新聞類、写真、地図等も多数所蔵されており、これらもモロッコ近現代史研究に有用であろう。

このように貴重な史料を所蔵しているダーウッド図書館であるが、ハスナー氏によれば特に公的な支援はなく、ご自身が私財を投じて管理・運営されているとのことである。それだけに、十分な保管体制をとれないのが悩みだとおっしゃっておられた。現に貴重な文書類もクリアファイルに投げ込まれたままであった。こうしたことを考えると、ぜひとも前述の文書類を手始めに、貴重なモロッコ史関連史資料の保存に向けて当図書館との協力関係を構築していきたいと痛感した。また我々のプロジェクト

と同様の関心を抱いておられるベンアブード氏との協力関係も、さらに進展させていくべきであろう。

最後の訪問地は、ラバトである。当地では、ムハンマド5世大学（ラバト大学）のモリスコ研究者ブーザイナブ氏と会う予定であったが、残念ながら諸般の事情により直接会うことは出来なかった。だが、仲介の労をとってくださった同じくムハンマド5世大学のムハンマド・マグラーウィー氏（専門は中世マグリブ・アンダルス史、またモロッコの手写本事情にも詳しい）によれば、ブーザイナブ氏本人は我々のプロジェクトに関心を持っておられるとのことで、今後もコンタクトを試みたい。なお、マグラーウィー氏自身も、我々のプロジェクトには関心を持ってくださったので、もしマイクロ化・デジタル化に協力していただければ、ぜひ我々のプロジェクトの意義を説いてもらいたい旨、依頼してきた。ただし、マグラーウィー氏によれば、ラバトの国立図書館（Al-Maktaba al-Waṭanīya, 旧総合図書館Al-Khizāna al-‘Āmmaを昨年秋に改称）については、すでにドイツとの協力により手写本類のマイクロ化がなされているとのことで、この方面での協力関係の構築は難しいかもしれない。

2週間という日程的な制限もあり、今後具体的に話が進展しそうなものは、残念ながらテトワンのダーウッド図書館だけという結果となった。しかし、チュニスやラバトの書店をめぐれば、マグリブにおけるモリスコやユダヤ教徒にかかわる研究がかなり進んでいることはうかがえた。また、かつてムハンマド・ダーウッドが収集したような史資料が、各地の旧家やザーウィヤ（スーフィー教団の修道場）などに眠っていることも考えられる。今後とも、マグリブ諸国におけるモリスコ・セファルディーム研究の動向に注目しつつ、史資料の収集へ向けた活動を続けるべきであろう。